

第3章 自然環境の現況と対策

第1節 自然環境

1 概況

(1) 気候・気象

ア 気候

本県の気候は、地形の影響を受けて太平洋側気候（温暖湿潤） 瀬戸内気候（温暖乾燥） 山岳気候（冷涼湿潤）の3つに大きく区別することができます。

イ 気象

平成13年の年平均気温の分布を見ると、県の沿岸部では約17℃前後である一方、県西部および山間部では12℃～15℃とやや冷涼になります。

平成13年の年降水量については、南部沿岸地方（穴喰3,172mm）が最も多く、次いで剣山山系南東側（木頭2,846mm、福原旭2,966mm）が多い地域となっています。一方剣山山系を境として、県北部（徳島1,737mm、池田1,455mm、半田1,678mm）では降水量が少なくなり、県南部の約2分の1の降水量となっています。

図2-3-1 平成13年の年平均気温分布図

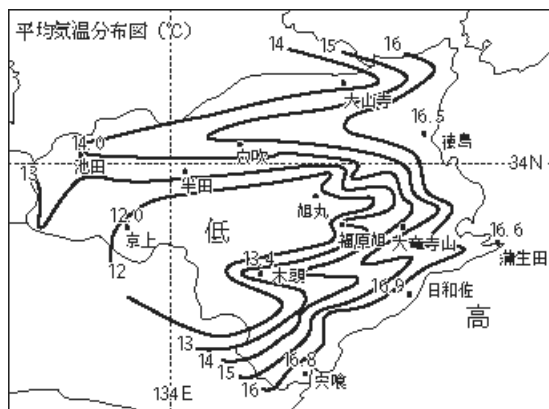
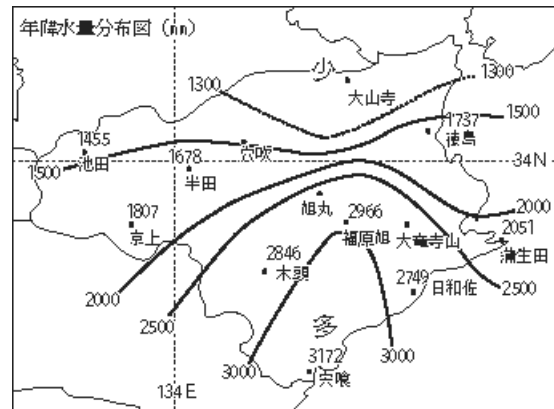


図2-3-2 平成13年の年降水量分布図



(2) 地形・地質

ア 地形

本県の地形は東西方向に分布する地質構造の影響を受けており、東西方向に山地や河川が分布しています。

(ア) 山地

山地は讃岐山脈、四国山地、海部山地の3つに大別することができます。北部の讃岐山脈は、標高が500～1,000mと比較的低いにもかかわらず、山麓に扇状地を伴います。四国山地は剣山（1,954.7m）や三嶺（1,893.4m）など、標高が1,000m以上の本県で最も高い地域を含む山地で、地すべり地形が発達しています。海部山地や四国山地の一部である剣山地では、崩壊による山麓堆積地形が見られます。

(イ) 低地

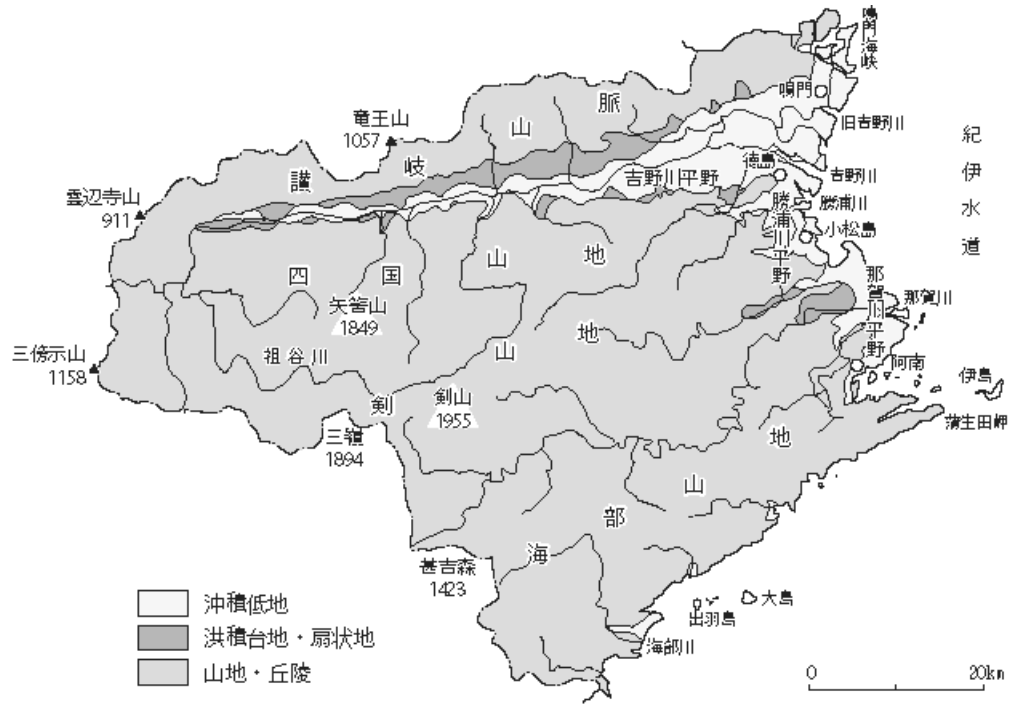
本県の低地は吉野川沿いのものが最大で、次いで東部沿岸の勝浦川、那賀川、桑野川の下流に見られます。県南では海部川河口付近に小規模な低地が見られる程度です。

(ウ) 河川

本県の河川は四国山地北側の吉野川水系と南部の那賀川水系、勝浦川など四国山地から東流して紀伊水道に注ぐ河川が代表的ですが、県南の太平洋岸では、海部川のように南流するものが見られます。

このうち吉野川の長さ（県内）は108.1km、那賀川は125.2km、勝浦川49.6km、海部川36.3kmなどとなっています。

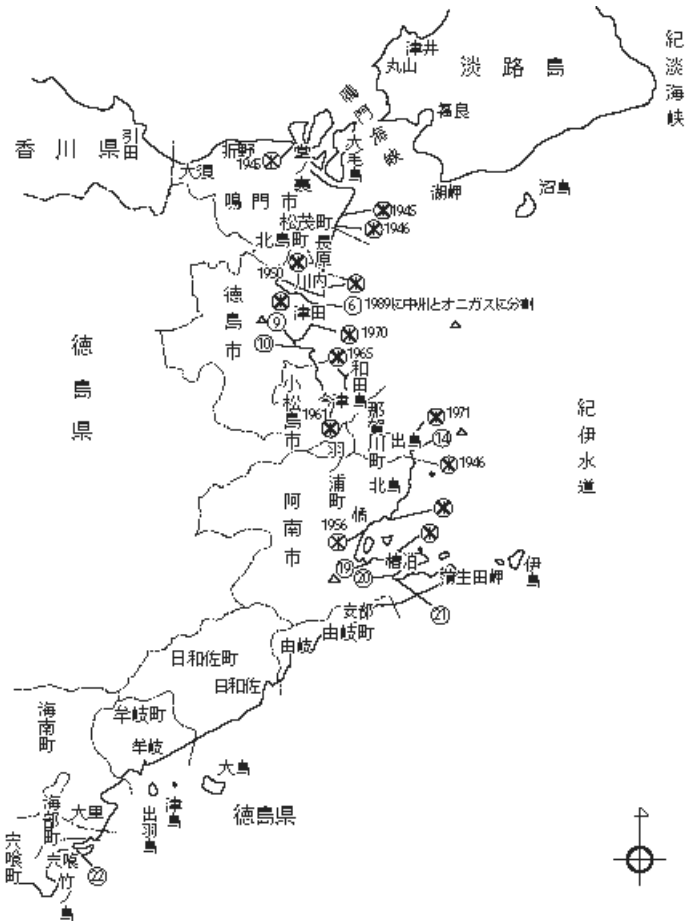
図2 3 3 徳島県の地形区分



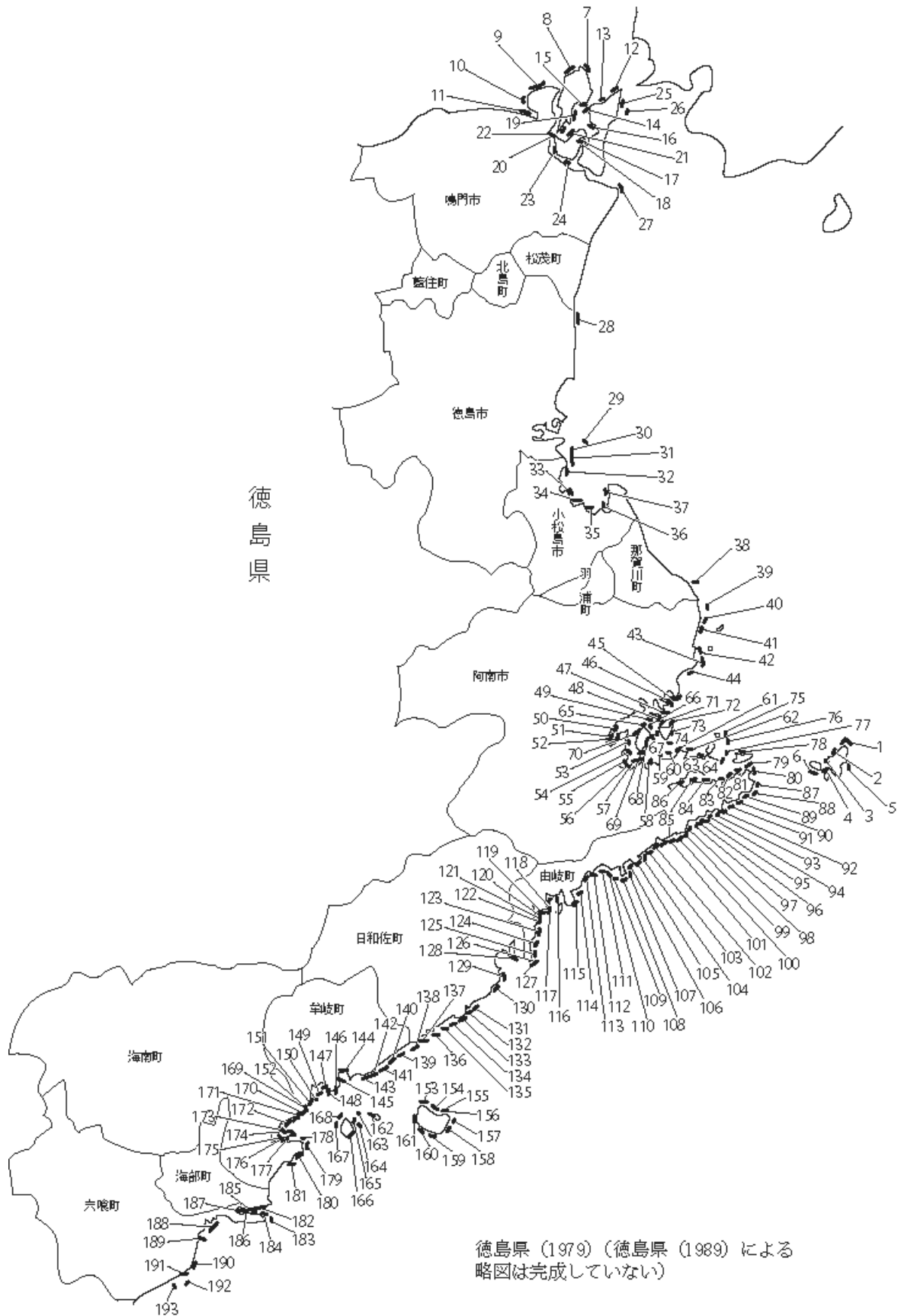
(寺戸恒夫・町田貞原図)

図2 3 4 干潟・藻場概略分布図

(1) 徳島県干潟



(2) 徳島県藻場



(二) 海 洋

本県周辺の海況について見てみると、室戸沖や和歌山沖を黒潮分岐流が北上する一方、本県沖を鳴門海峡から流出する内海水や紀伊水道沿岸水が南下するという状況となっています。

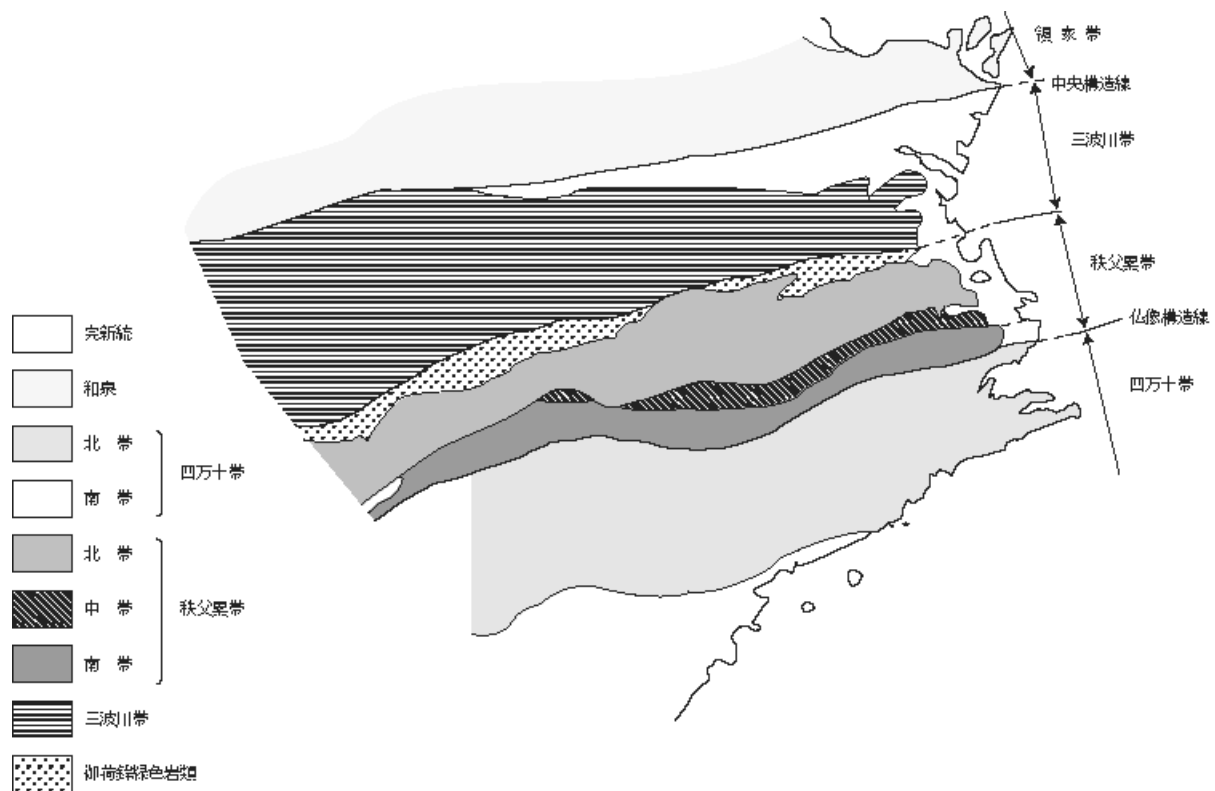
県内における自然海岸の総延長に対する割合は平成6(1994)年の時点で51.04%で、同様に砂浜海岸の割合は7.86%に過ぎません。干潟については平成6(1994)年の時点で、紀伊水道西海域に10か所・118ha、徳島(太平洋)海域で1か所・6haがあります。また、1ha以上の藻場については、平成6(1994)年までに19か所・108haが減少し、196か所・1,421haとなっています。造礁サンゴについては、平成6(1994)年で大島・竹ヶ島周辺に7.1haが見られています。

イ 地 質

本県の地質構造は中央構造線や仙像構造線などの構造線により切られ、東西に帯状に分布しています。北から、砂岩・泥岩などから構成される領家帯(和泉層群)、結晶片岩などから構成される三波川帯、御荷鉾緑色岩類、秩父累帯、砂岩・泥岩などからなる四万十帯の順に並んでいます。洪積層は吉野川や那賀川などの河川地域で、また沖積層は吉野川下流の徳島平野から那賀川河口域にかけての沖積低地や各河川の河口部などで見られます。なお活段層について、本県では中央構造線断層系と鮎喰川段断層系の2種類から知られています。

一方、本県の南方沖には西南日本の属するユーラシアプレートと南方のフィリピン海プレートの接する南海トラフがあり、ここでフィリピン海プレートが沈み込んでいます。

図2 3 5 徳 島 県 の 地 質 区 分



須崎ほか編 H 3 (1991) 「日本の地質 8 四国地方」より抜粋

(3) 野 生 生 物

ア 植 生

本県の自然植生の割合は、平成6(1994)年の段階で既に県土面積の3.9%に過ぎない状態となっており、県下のほとんどはスギ・ヒノキなどの植林地やアカマツ林などの代償植生地、農用地などで覆われています。

残された自然植生を見ると、ヤブツバキクラス域（0～1,000m）では社叢林や島嶼としてわずかに残されているに過ぎません。森林については、沿岸域から内陸に向かうにつれて、海岸低木林からシータブ林（ムサシアブミータブノキ群集、ミミズバイースタジイ群集など）、カシモミ林（カナメモチーコジイ群集、コガクウツギーモミ群集など）へと移行します。この他、吉野川河口などにはヨシ群落が見られます。またハマグルマーコウボウムギ群集など海岸砂丘草木植生は、かつて県東部の砂浜海岸で見られましたが激減しています。

ブナクラス域（1,000～1,700m）の森林は、現在では剣山周辺に分布しているに過ぎません。代表的な気候極相林であるブナ林（シラキブナ群集）やウラジロモミ群落、山地渓谷林であるヤハズアジサイサワグルミ群集などが見られます。

コケモートウヒクラス域（1,700m以上）は、剣山などの山岳山頂部に分布しており、シラビソ（シコクシラベ）群集やコメツガ群落、シコクフローショウジョウスゲ群集などが見られます。

イ 植 物

本県では、維管束植物として3,166種類（阿部, 1990(変種、品種、帰化植物を含む)）、高等菌類で607種（大橋, 1986）、藻類（海藻）として242種（徳島県水産課, 1995）が確認されています。しかし、蘚苔類、藻類など維管束植物以外については、分布情報などについて、十分に調査されていないのが現状です。

●表 2 3 2 本県に分布する維管束植物の概況（阿部, 1990）

シダ植物	363種
種子植物	2,803種
裸子植物	24種
被子植物	2,779種
合 計	3,166種

●表 2 3 1 植生自然度別出現頻度（自然環境保全基礎調査、1994）

区 分 内 容	比率 (%)
自 然 草 原	0.2
自 然 林	3.7
二次林（自然林に近いもの）	4.2
二 次 林	28.0
植 林 地	40.6
二次草原（背の高い草原）	0.5
二次草原（背の低い草原）	1.1
農 耕 地（ 樹 園 地 ）	2.9
農 耕 地（ 水 田 、 畑 ）	15.9
市 街 地 、 造 成 地 等	1.1
自 然 裸 地	1.1
開 放 水 域	0.7
計	100.0

●表 2 3 3 高等菌類（キノコ）（大橋, 1986）

担 子 菌 類	559種
子 の う 菌 類	48種
合 計	607種

●表 2 3 4 藻類（海藻）（徳島県水産課, 1995集計）

緑 藻	33種
褐 藻	70種
紅 藻	139種
合 計	242種

ウ 動 物

動物のうち脊椎動物については、哺乳類で51種、鳥類で336種、は虫類で18種、両生類で17種、陸水産魚類で233種が確認されています。一方、無脊椎動物については把握が十分になされていないのが現状であり、その種類については、表 2 3 5 に示します。

●表2 3 5 本県で記録または確認された主な動物種の概況

脊 椎 動 物		無 脊 椎 動 物			
哺 乳 類	51種	甲 殻 類	235種	ト ン ボ 類	86種
鳥 類	336種	淡水・汽水・海産貝類	約850種	半 翅 目	100種
は 虫 類	18種	陸 産 貝 類	162種	鱗翅目(チョウ類)	100種以上
両 生 類	17種	ク モ 類	318種	甲 虫 目	約3,000種
魚類(陸水産魚類)	233種	ザ ト ウ ム シ 類	5種		
		(海産無脊椎動物)	127種		

参考・引用文献 財団法人とくしま地域政策研究所、2000 環境現況基礎調査(平成13年度徳島県委託調査成果品)
(徳島県の委託による調査報告成果品、未公表)

2 自然環境保全基礎調査(みどりの国勢調査)及び生物多様性調査

(1) 概 要

自然環境保全基礎調査は、自然環境の現況の把握と解析を行い、科学的に自然環境保全行政を推進するため、自然環境保全法第4条に基づき、概ね5年毎に環境省が実施する基礎調査です。

また、平成6年度からは、我が国の野生動植物に関する全国的な分布概況等を把握するとともに、特に存在基盤が脆弱で減少傾向にある種などについて分布状況等の調査を行い、国内の生物多様性保全施策の基礎資料を得るため、生物多様性調査(種の多様性調査)が開始されました。

これまでの調査実績は次表のとおりです。(表2 3 6)

●表2 3 6 調査の概要

調 査 期 間	調 査 対 象
<ul style="list-style-type: none"> ●自然環境保全基礎調査 第1回調査 (昭和48年度) 第2回調査 (昭和53年度・昭和54年度) 第3回調査 (昭和58年度～昭和62年度) 第4回調査 (昭和63年度～平成4年度) 第5回調査 (平成5年度～平成10年度) 第6回調査 (平成11年度～平成15年度) 	<ul style="list-style-type: none"> ア 陸 域 (植物、動物、地形・地質) イ 陸 水 域 (湖沼・河川) ウ 海 域 エ 生 態 系
<ul style="list-style-type: none"> ●生物多様性調査 (種の多様性調査) 	<ul style="list-style-type: none"> ア 種 イ 生 態 系 ウ 遺 伝 子
<ul style="list-style-type: none"> ●海域自然環境保全基礎調査 	(平成9年度～平成13年度)

(2) 調査の内容

ア 陸 域(うち植物に関する調査)

(ア) 植生調査(第2回・第3回・第4回・第5回・第6回調査で実施)

植生は、地域ごとに様々な様相を示すが、この多様性は植生の存在する地域の地誌、気象、地質、地形、さらには人間を含む他の生物との相互作用等に基づく植物の進化、適応の結果であり、このため、人間の手のつけ具合である「自然度」を10ランクに分け、現況の調査を行いました。

本県では、県下の植生の状況をより詳細に把握するとともに、地域レベルの計画に対応できる植生図を整備するための一環として、県下の全域について植生状況調査を実施し、空中写真の判読及び現地確認により5万分の1の現存植生図を作成しました。

(イ) 特定植物群落調査（第2回・第3回・第5回調査で実施）

植物群落のうち、規模や構造、分布等において、代表的典型的なもの、代替性のないもの、脆弱なもの等を、原生林、稀な植物群落、郷土景観を代表する植物群落等、8つの選定基準により選定しました。

この結果、本県では、第2回調査により、68群落の植生状況、面積、保護の現状等を現地調査及び既存資料で取りまとめましたが、第3回の調査では、新たに19群落を調査し、1群落が区域縮小、3群落が消滅し、現在では84群落が確認されています。

イ 陸 域（うち動物に関する調査）

(ア) 動物（哺乳類）分布調査（第2回調査で実施）

大型及び中型獣7種の生息分布状況に関する聞き取り調査を実施し、県内での概況は次のとおりです。

（表2 3 7）

●表2 3 7 動物（哺乳類）分布状況

動物種名	分 布 状 況
ニホンザル	鳴門、那賀、海部、美馬、三好の地区に群れになって生息し、県下一円に比較的多くの分布が見られる。
シカ	ニホンザル同様県下一円に比較的多く生息が見られる。
イノシシ	阿讃山系には生息数は極めて少ないが、それ以外は全域に生息が見られる。
キツネ	県下では生息の情報が得られなかった。阿讃山系では、大正期～昭和30年代にかけて絶滅したものである。（調査後、生息の情報が得られた。）
タヌキ	県下では最も広く分布が見られる種である。
ツキノワグマ	剣山周辺にのみ出没が見られ個体数も限られている。剣山周辺でも昭和40年代に絶滅した地域がある。
アナグマ	主に阿南、那賀地区及び県西部に生息が確認されたが、個体数は少ないものである。

(イ) 動物（両生・は虫類）分布調査（第2回調査で実施）

両生は虫類のうち、絶滅のおそれのある種及び学術上重要な種の生息状況と分布について、今回の調査選定種のうち、本県では、両生類6種（モリアオガエル、オオサンショウウオ、カスミサンショウウオ、プチサンショウウオ、オオダイガハラサンショウウオ、ハコネサンショウウオ）と、は虫類4種（タワヤモリ、アカウミガメ、アオウミガメ、タイマイ）について調査を実施しました。

(ウ) 動物（淡水魚類）分布調査（第2回調査で実施）

淡水域に生息する魚類のうち、絶滅のおそれのある種及び学術上重要な種の成育分布調査を行いました。

本県における調査実施種は、オヤニラミ、カマキリ、ホトケドジョウ、オオウナギ、チョウセンブナ、アカメ、ヒメハゼ、ヒナハゼ、アベハゼの9種です。

これらのうち、オヤニラミは、桑野川、岡川、福井川で生息が確認されていますが、河川改修、水質汚濁等で年々生息地が奪われています。

(エ) 巨樹・巨木林調査（第4回調査で実施）

良好な景観の形成、野生鳥獣の営巣の場などの自然環境保全上重要な価値を有している巨樹、巨木林は、その実態が不明なまま急速に失われつつあります。

このため、地上から1.3mの位置での幹周が3m以上ある巨木について、その所在地、樹齢、周囲の状況、健全度等を現地調査しました。

この結果により、保全対象が明確化し、保全地域等の既存指定制度、ナショナルトラスト等の施策を通じた保全が促進され、また、誰にも理解されやすい保全対象であることから、国民の自然保護の関心を高めることが期待できます。

県内では、昭和63年度現在、巨樹（単木）984件、巨木林19件の合計1,003件が数えられています。

（表2-3-8）

●表2-3-8 巨樹・巨木林調査（幹周囲表）

順位	樹種名	所在地・通称名	幹周(cm)	独特の呼称	保護制度指定
1	イチヨウ	上板町 乳保神社	1,342		天然記念物等（国）
2	クスノキ	三加茂町 加茂	1,300	加茂の大クス	天然記念物等（国）
3	クスノキ	山川町 川田市	1,235		
4	クスノキ	藍住町 春日神社	1,205		天然記念物等（県）
5	イチヨウ	美馬町 中山路銀杏庵	1,190	お乳大明神	
6	クスノキ	上板町 椿神社跡	1,163	鳥屋の大クス	天然記念物等（県）
7	スギ	西祖谷山村 上吾橋 五所神社	1,150		天然記念物等（村）
8	クスノキ	阿南市 大宮八幡神社	1,080		
9	クスノキ	鴨島町 森藤字平山	1,015	壇の大クス	天然記念物等（県）
10	スギ	東祖谷山村 大枝鉾神社	1,000	最大のもの：鉾杉	天然記念物等（県）

（オ）動物（昆虫類）分布調査（第2回調査で実施）

昆虫類のうち、絶滅のおそれのある種及び学術上重要な種の生息状況と分布について調査を実施しました。

本県では、指標昆虫類の10種（ムカシトンボ、ムカシヤンマ、ハッチョウトンボ、ガロアムシ目、タガメ、ハルゼミ、ギフチョウ、ヒメギフチョウ、オオムラサキ、ゲンジボタル）及び、調査対象昆虫類選定基準に基づく特定昆虫類60種について調査を実施しました。

ウ 陸域（うち地形地質に関する調査）

（ア）自然景観資源調査（第3回調査で実施）

自然景観の骨格をなす地形・地質及び自然現象を自然景観資源として抽出したもので、県内では「山脈・山地・高地」等の資源31種、163箇所が抽出されています。

エ 陸水域

（ア）湖沼調査（第2回・第3回・第4回調査で実施）

湖沼のうち、原則として面積1ha以上の天然湖沼を調査対象としましたが、四国では唯一、海部郡海南町の海老ヶ池がその対象となりました。

この海老ヶ池における水質状況、透明度、湖岸改変状況、湖岸土地利用状況について調査を実施しました。

（表2-3-9）

●表2-3-9 海老ヶ池改変状況表

調査年度	標高m	面積ha	長湖岸線延km	透明度m	面積埋立干拓km ²	湖岸改変状況			湖岸土地利用			建大築規物模	湖沼型
						自然	半自然	人工	自然	農業	市街		
（第4回） 平3	0	18	3.3	0.5	0	1.6 ^{km}	0.8 ^{km}	0.9 ^{km}	2.2 ^{km}	0.8 ^{km}	0.3 ^{km}	0	富栄養湖
						48.5%	24.2%	27.8%	66.7%	24.2%	9.1%		
（第3回） 60	0	18	3.3	1.0	0	1.7 ^{km}	0.8 ^{km}	0.8 ^{km}	2.2 ^{km}	0.8 ^{km}	0.3 ^{km}	0	富栄養湖
						51.6%	24.2%	24.2%	66.7%	24.2%	9.1%		
（第2回） 53	0	18	3.3	1.0	0	1.8 ^{km}	0.8 ^{km}	0.7 ^{km}	2.5 ^{km}	0.8 ^{km}	- ^{km}	0	富栄養湖
						54.5%	24.3%	21.2%	75.8%	24.2%	-		

(イ) 河川調査（第2回・第3回・第4回調査で実施）

河川の改変状況、魚類の生息状況、原生流域の状況等を調査し、河川の自然性の現況及び利用の状況を把握することを目的に調査を実施しました。

本県では、吉野川と那賀川における水際線の改変状況や河原、河畔、河川の利用状況、魚道の状況及び不快要因について1キロ区間毎に調査を実施し、また、魚類の生息状況についても、吉野川では6カ所、那賀川では10カ所で投網等の捕獲により、調査を実施しました。（表2 3 10）

その結果、吉野川は那賀川よりも人工化が進んでいます。

●表2 3 10 吉野川、那賀川改変状況表

調査対象河川名	調査実施調査区間数	水際線の改変状況			河原の土地利用状況				河畔の土地利用状況								
		*1 人工化された水際線の割合（延長の10分比）			*2 人工化された河原の割合（面積の10分比）				右岸			左岸					
		0~2	3~5	6~10	0~2	3~5	6~10	計	自然地		農 業 地	市 街 地	自然地		農 業 地	市 街 地	
									樹林地	その他			樹林地	その他			
吉野川	60	107	75	15	17	37	29	12	78	27	1	49	30	25	1	62	19
	54	107	78	12	17	36	30	11	77	29	1	51	26	28	1	64	14
那賀川	60	112	93	2	17	31	1	0	32	73	0	34	5	62	1	36	13
	54	112	95	0	17	30	0	0	30	73	2	34	3	65	0	34	13

調査対象河川名	調査実施調査区間数	河川工作物の有無				取水施設のある区間数	河川の利用状況							不快要因								
		(魚の遡上)					風景探勝(遊歩道)	キ ャ ン プ	温 泉	ボ ー ト	川 下 り	常 設 釣 場	漁 業	水 の に ご り	水 面 上 の ア ワ	悪 臭	ゴ ミ ・ 残 材	砂 利 採 取	河 畔 の 道 路 法 面	水 量 の 少 な さ	湯 水 時 の ダ ム 湖 岸	
		可 能		不 可 能																		
		有	無	有	無																	
吉野川	60	107	1	2	0	0	3	10	0	0	0	2	0	27	0	0	0	13	20	0	0	0
	54	107	1	2	0	0	3	10	0	0	0	2	0	27	0	0	0	9	20	0	0	0
那賀川	60	112	4	0	0	6	3	5	4	2	6	2	0	27	55	0	0	11	13	0	0	7
	54	112	4	0	0	6	2	5	2	2	5	2	0	26	51	0	0	12	12	0	8	8

*1「人工化された水際線」とは、コンクリート護岸・矢板等の工作物により構成された水際線をいう。

*2「人工化された河原」とは、公園・グラウンド等の施設の土地利用地、未利用造成地・農業地になっている河原をいう。

オ 海 域

(ア) 海岸調査（第2回・第3回・第4回調査で実施）

海岸線（汀線）及び海岸陸域の自然状態や利用状況、汚染状況等の現況調査を行い、縮尺2万5千分の1の地形図で、それぞれの区分の延長距離を電算機により測定しました。

なお、対象とする海岸線は、「全国海岸域現況調査（建設省：昭和49年度）」の「海岸区分計測図」に表示されている海岸線で、短径100m以上の島を含みます。

本県における調査結果は次のとおりです。（表2 3 11及び2 3 12）

●表2 3 11 海岸線の改変状況

調査年度		海岸線延長	自然海岸		半自然海岸		人工海岸		河 口	
(第4回)	徳島県	347.1 ^{km}	177.2 ^{km}	51.0%	37.9 ^{km}	10.9%	125.2 ^{km}	36.1%	6.8 ^{km}	2.0%
	H6 全 国	32,778.9	18,105.7	55.3	4,467.5	13.6	9,941.8	30.3	264.0	0.8
(第3回)	徳島県	347.6	177.7	51.1	38.4	11.0	124.7	35.9	6.8	2.0
	S60 全 国	32,471.9	18,402.1	56.7	4,511.4	13.9	9,294.5	28.6	263.8	0.8

●表2 3 12 海岸陸域の土地利用状況(第2回調査)

	海岸線延長	自 然 地		農 業 地		市 街 工 業 地		河 口	
徳島県	343.5 ^{km}	223.4 ^{km}	65.0%	42.8 ^{km}	12.5%	70.5 ^{km}	20.5%	6.8 ^{km}	2.0%
全 国	32,170.2	19,369.2	60.2	4,254.0	13.2	8,283.4	25.8	263.7	0.8

(イ) 干潟・藻場・サンゴ礁分布調査(第2回・第4回調査で実施)

沿岸域における重要な生物環境である干潟・藻場・サンゴ礁の調査を実施しました。

本県では海域を、北から播磨灘南海域、紀伊水道西海域及び徳島海域の3海域として、その分布域と消滅域を、現地調査及び既存資料で取りまとめました。

調査の結果、干潟は播磨灘南海域では消滅していることが判明しました。(表2 3 13)なお、第4回調査では、それぞれの最新の分布状況と前回調査以降の消滅状況について調査しました。

(ウ) 海域生物調査(第2回・第3回調査で実施)

沿岸域における生物の生息状況及び生息環境を継続的に監視していくため、潮上帯(飛沫帯)及び潮間帯に生息する生物を調査しました。

本県では、事前調査により、次の2カ所を調査場所として選定し、生物の採取を行いました。なお、第3回調査では、「海域生物環境調査」として継続実施しました。

- ・阿南市椿町須屋地先海岸(砂浜浜からなる包囲海岸)
- ・海部郡穴喰町大久保板取地先海岸(磯浜からなる開放海岸)

(エ) 海域環境調査(第2回調査で実施)

汚濁が進む沿岸域の現状を、生物の生息状況を通して把握するため、プランクトンや底生生物等について調査しました。

本県では海域を、播磨灘南海域、紀伊水道西海域及び徳島海域の3海域として、プランクトン(ネット法と採水法による)、底生生物、付着生物(本県には記録はない)、大腸菌、赤潮のそれぞれについて調査しました。

●表2 3 13 干潟・藻場・サンゴ礁分布表(第4回調査より)

(単位: ha)

干潟・藻場・サンゴ礁の区分	海 域 名	分 布 域		消 滅 域	
		調査区数	面 積	調査区数	面 積
干 潟	播 磨 灘 南	0	0	0	0
	紀 伊 水 道 西	10	118	6	70
	徳 島	1	6	0	0
	計	11	124	6	70
藻 場	播 磨 灘 南	9	45	4	9
	紀 伊 水 道 西	75	476	10	78
	徳 島	112	900	5	21
	計	196	1,421	19	108
サ ン ゴ 礁	播 磨 灘 南	0	0	0	0
	紀 伊 水 道 西	0	0	0	0
	徳 島	9	7.1	0	0
	計	9	7.1	0	0

第2節 自然環境保全地域

1 自然環境保全調査

県内の優れた自然環境を保全するため、各地の自然環境の現況及び保全計画を徳島県自然環境保全条例第7条に基づいて調査を行っています。(表2-3-14)

●表2-3-14 自然環境保全調査地域

(単位: ha)

調 査 地		面 積	特 徴
町 村 名	箇 所		
上 勝 町	高 丸 山	29.0	広葉樹(ブナ等)天然林
山 城 町	野 鹿 池 山	10.0	ホンシャクナゲ、オオスギゴケ等
神 山 町	柴 小 屋	20.0	広葉樹(ブナ等)天然林
木 頭 村	池 野 河 谷	90.0	天然スギ、広葉樹天然林
木 頭 村	折 宇 谷	120.0	広葉樹天然林
木 沢 村	西 三 子 山	65.0	イワシデ林

2 自然環境保全のための地域・地区指定(自然環境保全地域の指定)

県下の優れた自然を現在の、あるいは更に将来予測される自然破壊から保護するため、自然環境保全基本方針に基づき実施している自然環境保全調査の結果を参考にして、県自然環境保全地域を次のとおり指定しています。(表2-3-15)

●表2-3-15 自然環境保全地域

(単位: ha)

指定年度	指 定 箇 所	面 積
51	高丸山 県自然環境保全地域	29.0
56	野鹿池山 //	10.0